

ゆるゆるも

第拾壹卷

第七號

フレールベル會

第拾壹卷第七號目次

○兒童の自我觀念

文學博士 元良勇次郎

○幼稚園と小學校との課業上の聯絡

佐々木 吉三郎

○子供の色彩感覺に就いて

文學士 菅原教三

○保育叢話

光藤ふで

○子供の望診

鹽野奇零

○子供の自重心

倉橋惣三

○云ふことを聞かぬ子供に就いて

和田實

○愛兒を失ひし二三の實例

戸倉廣雅

○保育の實際

△幼兒に對しての説話振り
後藤りん

フレイベル會規則

第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルチ以テ目的トス

第二條 本會ハフレイベル會ト稱シ東京ニ置ク

第三條 會員タルモノニシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ

第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一月金拾錢ヲ贈出スベシ

第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスアルベシ

第六條 本會ノ目的ヲ達センガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ

一 總會 毎年四月廿一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、保育參考品幼兒成績物展覽 會務ノ報告 幹事ノ選舉等ヲナス

一 分會 日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ

一 常會 毎年二月、六月、十月、十二月ノ第二土曜日之ヲ開キ

一 組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスルモノヲ以テ組織シ

一 雜誌發行 毎月一回雜誌ヲ刊行シテ之ヲ會員ニ配布ス

一 前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件

第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長 一人 會務ヲ總理ス

副會長 一人 會長ヲ補助シテ會務ヲ掌理ス

幹事 若干人 會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分掌ス

評議員 若干人 重要ナル事件ニ關シ會長ノ諮詢ニ應ズ

會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス

第九條 主幹、幹事、評議員ハ會長ノ特選トス

第十條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ルルコトアルベシ

第十一條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラサレハ變更スルコトヲ得ス

購讀の申込

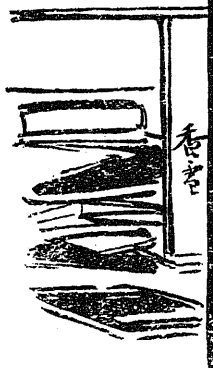
(振替口座東京) 一七二六六番

本誌を購讀なされたき方は會費一ヶ月金十錢の割合で一ヶ月分をまとめて振替貯金へ御拂込下されば直に雜誌を發送致します。

- ◎一册郵稅共金拾一錢
- ◎六册前金郵稅共六拾錢
- ◎拾二册同金壹圓貳拾錢
- ◎郵券代用一割増



號七第卷一拾第



兒童の自我觀念

(フレーベル會總會に於ける講演速記)

文學博士 元 良 勇 次 郎

ゆるい

今日は此のフレーベル會の總會に於いて、私が御話することの機會を得た事は、私の最も愉快に思ふ所であります。で先づ題としては、兒童の自我觀念としました即ち自分〜といふことの觀念は、どう云ふものであるか、又どう云ふ風に發達するものであるかと云ふやうな事を、話して見たいと思ふのであります。

斯う云ふ事柄は、餘程むづかしい複雑な事でありまして、一場の話で全部を盡すやうなことは到底出来ませぬ、實際の具體的の方面からは唯今河井先生より、御話がありましたやうなことでありませう。私の御話することは、幾らか又理屈の方面になるかも知れませぬ。けれども斯う云ふことは、色々の方面から見るが宜しからうと思ふのであ

ります。

此の「自分」と云ふことの考は、我々何時の間にか知らない間に漸々得て居るのでありまして、既に氣の付いた時には、もう充分これが自分、これが他人とハッキリ區別が付いて居るのであります。其初め兒童の幼稚な時分には、兒童が自ら自分の心を觀察して、さうして其経験を話すといふやうな事は、到底出来ない事である。其氣の付いた時は既に遅い、故に研究が餘程むづかしいのであります。併ながら之には色々の方法もありまして、事情から推して、先づ斯う云ふものであらうと云ふやうなことを幾らか云ふことは出来るのであります。

一般の吾人の経験といふものは、此軀軀の外にあつて、或は風が吹くとか、雨が降るとか、水が出るとか、嵐が起るといふやうに、自分の軀軀以外の事柄を色々に経験する、其色々な事を經驗する間には、其経験の相互間に何か聯絡があるだらう

と云ふやうな事を思ふ、例へば風が吹けば、其所等の木がザワ／＼云ふて居る。木がザワ／＼云ふて居るから風が吹くか、風が吹くから木がザワ／＼云ふのか、孰らだか分らないけれども、聯絡があるだらうといふ考は起るのであります。私の古郷の家の隣に大きな松の樹がありまして、何時でも風が吹くとエライ音をしてゴウ／＼鳴る。で子供心に、松があゝ云ふ音をするからして、其所から風が出て来るやうに思つて居つたことがあります。さう云ふやうな風に何かと経験して居る中に、彼此の間に聯絡があるだらうといふやうなことを思ふ、偶々間違つて居りまして、兎に角さう云ふ考を起すのであります。

それから又我々の、身體の中に、色々な経験がある。或は腹が減れば飢いといふ感じが起る、身體が疲れ切つた時に眠れば、非常に愉快になる等の如き色々な経験をします。即ち身體の外にあつては山川風雨の経験もあれば、身體の中にあつては

悲^{かな}し^しだ^り喜^{よろこ}んだ^り、氣^き分^{ぶん}が宜^よつ^たり惡^{わる}つ^たり、色^{いろ}々の經^{けい}験^{げん}がある^それ^である^が。其^{その}色^{いろ}々の經^{けい}験^{げん}の聯^{れん}絡^{らく}を付^つける^には身^{しん}體^{たい}の中^{なか}にある^感覺^{かく}及^おび^感情^{じやう}で聯^{れん}絡^{らく}を付^つけて行^いく^{とい}ふ^自然^{ぜん}の傾^{けい}向^{かう}がある^天氣^きにな^つたら愉^ゆ快^{かい}、雨^{あめ}模^も樣^{やう}にな^つて來^くれば不^ふ愉^ゆ快^{かい}と云^いふやうな聯^{れん}絡^{らく}が付^ついて來^くる。色^{いろ}々^く聯^{れん}絡^{らく}の付^ついて行^いく中^{なか}に、自^じ分^{ぶん}の心^{こころ}の中^{うち}で、斯^かう云^いふ^ことを^したい^あい^ふ事^{こと}を^したい^と云^いふやうな、一^{いっ}種^{しゆ}の内^{ない}部^ぶの衝^{しょう}動^{どう}が起^おけると、手^てが自^じ然^{ぜん}に動^{うご}く、我^{われ}々^く子^こ供^{ども}の中^{うち}か^ら馴^なれて居^ゐる^から不^ふ思^し議^ぎに思^{おも}は^ない^けれ^ども、考^{かん}へて見^みると餘^よ程^{ほど}不^ふ思^し議^ぎな^ことが^ある。幸^{さい}に健^{けん}全^{ぜん}に生^うれて居^ゐる^もの^である^から、手^てを舉^あげやう^と思^{おも}へば舉^あがる、下^さげやう^と思^{おも}へば下^さがる。聲^{こゑ}を發^はしやう^と思^{おも}へば發^はせらる^るやうに^出來^でて居^ゐて、^それを^當り^前の^{やう}に^思つ^て居^ゐる^けれ^ども、段^{だん}々^く研^{けん}究^{きゆう}し^て見^みるとナカ^く不^ふ思^し議^ぎな^ことで、學^{がく}者^{しゃ}と雖^いど、古^こ來^{らい}此^{この}間^{あひだ}の聯^{れん}絡^{らく}を研^{けん}究^{きゆう}す^るに^は餘^よ程^{ほど}困^{こん}難^{なん}して居^ゐる^ので^ある。

子^こ供^{ども}の^時の^事を^一切^{さい}自^じ分^{ぶん}で、之^{これ}を^観察^{くわんさつ}す^るこ^とは^出來^でない、觀^{くわん}察^{さつ}す^るこ^とが^出來^でる^{やう}にな^つた^時分^{ぶん}には子^こ供^{ども}の^性質^{せいしつ}は^無く^なつ^て居^ゐる^{とい}ふ、困^{こん}難^{なん}がある^けれ^ども、爰^{こゝ}に^一つ^面白^{おもしろ}い^話がある^それ^はどう^云う^事で^あるか^{とい}ふ^と、十^{じゅう}年^{ねん}程^{ほど}前^{まえ}に亞^あ米^{めい}利^り加^かに、ハナ^{とい}ふ^或る^説教^{せうきやう}者^{しや}が^あり^まし^て、其^{その}人^{ひと}が、或^{ある}日^ひ遠^{えん}方^{ほう}に説^{せつ}教^{きやう}に^行つ^て、^それ^から^馬車^{しや}に^乗つ^て歸^{かへ}る^途中^{ちゆう}、能^よく^亞米^{めい}利^り加^かな^んか^には^ある^事で、路^ろ傍^{ぼう}に^赤く^塗つ^た大^{おほ}き^な器^き械^{かい}が^置て^あつ^た、^所が^馬が^それ^を見^みて^驚いて^荒れた^{ので}あり^ます。^それ^が爲^{ため}に、ハナ^{とい}ふ^人は、馬^ば車^{しや}か^ら抛^{ほう}り^出さ^れて^大怪^{おほ}け^いを^して、人^{ひと}事^じ不^ふ省^{せい}にな^つた^{ので}あり^ます。^それ^から^近邊^{きんぺん}の^人々^{びん}は^驚いて、^これ^を介^{かい}抱^{ほう}し^た所^{ところ}が、氣^きの^付く^丈け^は付^ついた。^眼を^明けて^{さう}して^息を^する^{やう}に^はな^つて^來た。^それ^で命^{いのち}は^取戻^{もど}した^譯で^あり^ます^が、スツ^きカ^リ記^き憶^{おく}を^失つ^て仕^し舞^まつ^た。^以前^{いぜん}の^事の^記憶^{おく}と^いふ^もの^がスツ^きカ^リ無^なくな^つて^仕舞^まつ^たの^です^から、赤^{あか}坊^{ぼう}と^同じ^こと^に

なつたのであります。けれども矢張り眞の嬰兒とは何所か違ふ所があつて其時經驗した事を記憶した後日言ふことが出来たのである。

兎に角以前のことはスツカリ忘れて仕舞つた。それだから、其所に人が來て据つて居るのも其の譯が一向分らない、唯だ其所に据つて居るといふことのみは見て知覺するけれども、何が何であるか言葉は無論、部屋は何所であるかわからない、總て智識といふものはスツカリ無くなつて仕舞つたのである。それから病院に連れて行かれて、寢臺の上へ寢かされて居る所が、或る時偶々自分が手を動かさうとした所が、手が動いたといふので、それを非常に不思議に感じて、それで段々手を向ふにやれば何んぼうでも動いて行く、ズツと寢床から起き上つて、向ふの方に手をやらうとした。此は後に話して分つたのでありますけれども、其當時は何故に起き上るか人が知らないから身體を動かしてはいけないといふので皆が寄つて其人を

寢臺に押し付けたと云ふのであります。其人は二十四五の男子であるから、ナカ／＼力が強い、一人や二人の看護人では押付ける譯に行かない、多くの人が皆な寄つて漸く、それを寢臺の上に押付けた。さうして括り付けて仕舞つた、病人は又、何故さう云う事をされるか分らない、兩方ながら譯が分らない、それでも括り付けられたから仕方なしに沈つとして居た。翌日、自分の親戚の者が來て、親切に言ふて之を解いて呉れたので、非常に嬉れしかつた、と言ふて居る。それから尙ほ、色々の經驗が書いてありますが、其中に、言葉を少しも覺へて居ないから、日々少しづつ、言葉を教へて貰つた。自分はズツと寢轉んで居るのに他の人が立つて歩くのが不思議であつた。又自分の部屋の戸を開けて、色々の人が入り代り立ち代り這入つて來る、戸の外に澤山の人が集つて居るやうな感じが起つた。男と女が違ふ着物を着て居るのををかしく感じた。それで或日看護婦に「あれは何

んだ、立つて歩くといふのはをかしい」と云つた
 ら「今にあなたも癒くなつたら、あゝいふ風に立
 つて歩く事が出来る」と云つて知らして呉れた。
 そのときは一向何の事だか分らなかつた。其外にも
 色々ありますけれども、さう云ふ風にして段々總
 ての事を新に覺へて行つたのであります。
 ところが或日妙な心持になつて來たから眠て暫く
 の後起きた所が、今度は傷をしてから其時まで
 経験した事をスツカリ忘れて仕舞つて。傷をする
 前の事が、其記憶にフト浮んで來た。何故自分は
 病院に居るのであらう、自分は説教に行つて歸り
 途に、馬が荒ばれたといふ事までは覺へて居る。
 それから後のことは何にも覺へぬ。さう云ふ風で
 暫時の後復入院後の人格になつた。人格の交互變
 換で數週間を費し終ひには、兩方の記憶が一致し
 やうとするけれども、どうも何んだか、函の蓋が
 丁度合はぬやうな風で、一致しやうとするけれど
 も一致しない、此等を一致せしめやうとすると非

常に苦しかつたといふで居ります。六七週間の後
 には終に兩方の記憶が巧く一致して其所でマア傷
 をした前の人でもなければ、又傷をした後の人で
 もない、二つ合はしたやうな人が出來たと云ふ話
 であります。

此一事を以て考へても、吾人は全然知らない間に
 経験して居るから、不思議に思はないのでありま
 すけれども、子供の時分の経験といふものは、お
 互の今日の経験に較べると餘程妙なものである。
 どう云ふ風に妙であるかと云ふと、活動の聯絡が
 不完全である。それから一つは變り易いといふこ
 とである、で今日は特別に此二つの點に就て話を
 して見やうと思ふ。

我々の自我と云ふものは一體何であるか、其方が
 少し考へて見なければならぬが、これは心理學
 に於ても餘程むつかしい問題でありまして、これ
 に就ては、古來色々の研究がある。けれども、今
 日の心理學から見ると一口に云へば、所謂意思作

用といふものが自分と云ふことになつて居るのであります。其だけのお話をしても一向分らぬことでありませんが、昔は心といふものは、身體の中にあつて死ぬ時分には人魂が身體を中から抜け出て行くといふやうに考へて居つたけれども、それは色々説明の出来ない事がある。例へば人格の分裂といふことがある。身體の中に、一人の人格が居るのが普通であるのに、場合に依つては、一個の身體の中に二人或は三人の人格が出来る事がある。固より之は病氣でありますけれども、又珍らしくないことである。其人格の分裂は、分つて云ふと、同時に二つの人格があつて一つの人格は足を動かさうとする、一つの人格はそれを止めやうとする。一方では行かうとする、一方では止まらうとする、モチ／＼して居るやうなことがある。

或は又繼續的人格分裂といふのがある。前きの八つの場合の如きは繼續的人格分裂である、或時は

一方の人格のみであり、又或時は元に返つて居るといふやうに、詰り意思活動の作用が、巧く統一して居るのを一つの人格といふけれども、それが身體は同一人でありても、心の作用が二つに分れる時には、これを人格分裂と云ふ。其人格分裂といふものは、唯だ一つの物が他の方へ代るといふばかりでなく、甲なる人格と乙なる人格とは、氣質が、違ふといふやうな場合がある。例へば甲なる人は平生ならば人格が非常に正直で温なしくして確實な人である。その人格が變つて、乙なる人格になると、人を欺すやうな性質になる。又普通の時には、極く氣の沈んだ憂鬱な人で、第二人格になると快活になつてソワ／＼するといふやうな事がある。それは病氣の話であります。病氣でなくつても、幾らか之に類したやうなことがある。例へば最も明かなのは、夢の場合に、何か外の人が見られて、自分に色々話をする事がある。さういふやうな場合に、自分に話をする人が、他から

來る譯ではない、矢張り此は自分の心の中の一部分である。或は神様が現はれた。或は惡魔が現はれたといふても、夢に見る神様、惡魔は、矢張り自分の心の作用である。此等の事は如何にも不思議な事です。何故ならば、夢に見るものは、皆な自分の心の中から來るので、心以外のものを見る譯はない、自分の心の中にあるのは、それが矢張り第一人格の知らないやうな事を、話してそれによつて、初めて自分が知るといふやうなのは不思議な事であるが此は實に人格分裂の傾向を現はして居る。

兒童は、人格分裂といふ方から云ふと言葉が少し當らないが……分裂と云はずと移動といふのが宜しからうと思ふ。心が未だ完全に統一されて居ないものである。完全に統一されて居ないから、兒童の自我觀念といふものは、我々の自我觀念のやうに定まつて居ない、兒童は自分が、牛になつたり馬になつたりして、さうして聲色などを使ふ。

又は他所から客が來る場合ならば、自分が一人て亭主役になつたり、今度は又御客様になりて、挨拶をする、と云ふやうな事をしてそれを愉快に思ふ。我々から見ると、何故愉快であるだらうかと思ふ位であるが、兒童の自我觀念と云ふものは、まだ充分統一せられて居ない者ですから、何處へでも自分を當て嵌めて、御客様にもなれば主人にもなり、牛になつたり馬になつたり、又は人を馬にして乗るといふやうな、色々の事をして其場合々に愉快を感じるのは、自分が一時スツカリそれになつたやうな心持になるからであります。それ等のことは、幾らか私共も多少記憶があるが、子供は唯ださう云ふ風に、人格の聯絡が不完全であるといふのみならず、性質、氣分までが變る。氣分の良い時は、非常に愉快がつて居るが、チヨツト何か少し厭やな事があると、直ぐ氣分を悪くする。氣分の良い時の子供と、悪い時の子供とは、まるで違ふ人のやうに見へる。誰れでも多少の變

化はあるけれども、子供は著しくそれがある。

其故に子供のする事は、主義一貫といふ風に、始めから終りまで聯絡が付くと云ふ譯には行かぬ、寧ろ付かないのが多い、其場合、其場合の氣分に依りて活動して居るから、一時間前のことを、まるで聯絡のないことをして居るやうのこともあるのみならず前に良い子供であつたが、後に悪い子供になるといふやうなこともある。大人にでも多少其れに類したことがあるが、子供には特にそれが劇げしい、けれどもそれは大人程害にならぬ。其様に聯絡が不完全であるといふ所を以て、従つて兒童の自我觀念といふものは余程不完全である。

それが、どう云ふ風に發達して行くかと云ふと、先程話した様に意思活動に依るので物を遣り放しにするといふことは、意思活動の方面からいふと最もいけないのであります。此は思想の組織が、最も不完全であるといふことを現はして居るので

あります。

八

意思活動といふことは、遣り放しの反對で、自分で實行したことが、自分の氣に適ふか適はないかを見定めるのが夫れが意思活動の重要な部分であります、それが完全なる意思活動である。併ながら、それは初めからさう完全に活動といふ譯には行かない、初めは矢張り遣り放しで、結果が良いか悪いかはかまはない、或は時に物を置いてそれが翌朝見當らない、すると夕べ仕舞う時に何處に置いたやうと捜し廻はる、幾度もさういふ事がある、今度は一定の所へ何時も仕舞つて置かなければいかぬといふことに氣が付いて来る。即ち先きのことを豫想して事をするやうになる。其所で意思活動といふものが起つて来る。尤もそればかりに放任して、置いては、意思の發達が余程遅れますから、親の教育といふものがあつて、色々注意するといふ事になる。併そこらは加減もので自分で氣の付くまで棄て、置くのは極端である

が、又余り親が干渉し過ると、自分で觀察して自分で悟るといふことが無くなつて、始終人に依頼するやうになる。先程話しましたやうに、子供は矢張り自分に依りて行くといふ習慣を付けなければならぬからして、自分で不都合だと感ぜしめるのが良い、例へば子供が朝寝過すのを余りやかましく云はぬで一二度遅刻させたら宜からう、それで自分に不都合を感ぜしめたが宜からうと思ふと思ふやうになる。さう云ふ様な譯けで、余り外から言ふのも、依頼心を起すし、余り棄て、置くのも、教育と云ふことを無視する事になるから、其所は手加減です、丁度幼児が歩み初めた時分に手を離しても、遠方から保護して居るやうな風に全く放任して仕舞へば危ない、からして、手を遠い所から廻はして監督する。朝寝過せば學校に遅れるといふことを自分に感ぜさせるやうにして行つたならば、其所で先見といふ事が出来るやうになるので、斯うすれば斯うなる。失敗を重ねる度に其不都合を感じて来る、幾ら親が外から教育し

て、教へたりしても、自分が實驗したことはない、自分で實驗して、それが次第に發達して来るのが自我の發達であります。さうして段々發達して来る中に、一方には統一といふものが漸々確實になつて来る。或時は非常に悲み或時は非常に喜ぶが、それが段々に變化が少なくなつて来る。何某といふものは斯う云ふ性質である。あの人は遅いけれども能く考へる性質だとか、あの人は確實な人だとか、あの人は敏捷な人間だとか、其人の特徴といふものが段々明かになつて来る。さうして其發達といふものは、兒童から青年になる頃に、最も劇げしき變化が起るのであります、併ながら又それから後にも矢張り年を重ねるに従つて經驗を積み、段々世間といふものに通じて来る。斯うすれば斯うなるといふことが豫じめ分るやうになる。當つて碎けるのではない。子供の中は當つて碎けるのであるけれども、年が行つて来ると當つて碎けては困る。實驗が段々に積んで来れば當らない前に用意する様になる。さう云ふ風に發達するのであります。

幼稚園と小學校との 課業上の聯絡

東京高等師範學校教授

佐々木吉三郎

學校の仕事と、幼稚園の仕事とを比べて見ると、其の間に餘程の違ひがあつて、幼稚園から小學校に移つた兒童が、何だかまるで様子の變つた所に来たやうな感じを起し、教師が兒童に對する態度も課業が急に系統的になることも又教材の分量が急に増加して來る等、急激な變化を感ずると云ふことは、餘り面白い事ではありません。出來得るならば其の間を圓轉にして、餘り急激の變化を感ぜしめないやうにしたいといふ希望は、獨逸あたりでは七十年このかたの問題であつて、學校と幼稚園とを有機的に結合せんが爲めにいろ／＼の苦心をして居ります、既にフレーベル自身も、丁度幼稚園の最上の學級即ちこれから小學校に移ると云ふ間際の學級を、媒介學級とでも譯しませう

か Die Vermittelungsklasse といふものを設けて、幼稚園と學校との中間に位する性質のものにして其の間の調和を謀つたものであります。丁度生れ落ちるとから幼稚園に這入るまでに四つの階級を設けて居ります、即ち

第一階段、乳兒期 これは申迄もなく母親の愛育の許に、主として身體を健全に育てる事を、注意する時期で、手足とか、五官などが、専ら發達する時期であります。

第二階段、家庭幼兒期 これは獨りで遊べるだけの部屋を興へて置いて、いろ／＼の玩具や何かで、身體、關節、五官等を自分で使つて、だん／＼發育させる時期で、尙言語もこの時期に發達するものであります。

第三階段、幼稚園期 これは大勢の子供の中に這入つて仲間の一として生活をする時期で、このやうに人間との交際によつて陶冶を受けると云ふ事は、これまでに比較して全く新たな事情である

のであります。尙いろくのもの直観し、知覺し、以て諸種の事物を知り、又自ら製作を致します。

物と物との關係、それ等の成立、成立の仕方などを、觀察する事も出来るやうになります。

第四階段、媒介學校期、之は今まで實地又は實物を直観して居つたのを、思考作用に訴へるやうに引き移す階段で、云はゞ事物直観を概念に導きこむ端緒を開く場所としてあります。

斯様に考へて居るのであつて、要するに、學校時期と、幼稚園時代とは、性質が違ふ。學校と云ふものは兒童に授けやうとする材料に重きを置くのに、幼稚園は材料でなしに、兒童其物が本體で、子供を只自然に發育させればよいといふ時期であるから、勢ひ兩者の間に幾分の溝渠が生ずるといふことは、止むを得ぬ事で、従つて其の中間に媒介學校、若しくは媒介學校と云ふものを設けて、之れを調和しやうといふ考へが趣つた事であらう

と思ひます。英吉利の方でも The Transition と云つて、丁度小學校と幼稚園との間に中間の階級を設けておきます、英國倫敦市なる有名なフレイベル教育院の實際を見ても、満三歳より六歳に至るものを幼稚園と呼び、六歳より八歳に至る迄の者を The Transition と呼び八歳より十四歳に至る迄を學校と云つて居ります、即ち此所では満二年間これ丈けの中間に位する性質のものを置くわけになつて居ります。佛蘭西でも classes enfantines と云つて、直譯したなら幼年級とでも申しませうかこれは矢張り、同國で申す母親學校、即ち幼稚園と小學校との中間に位する、所謂媒介學校であります。

斯様に幼稚園の本元たる獨逸のみならず、英吉利、佛蘭西、其他にもあるだらうと思ひますが、一々よく存じませんけれども、要するに幼稚園と小學校とを、仕事の上から圓滑な聯絡のあるものにしやうといふ考へが、随分何十年來、現はれて居

るといふことが事實であります。

翻つて我が日本の事情を考へて見ますのに、この問題は、あまり人々によつて注意されて居らないのみならず、甚しきは小學校に従事する人々が、幼稚園といふものをなくともよいものと考へて、幼稚園を経て來たものは小學校から見ると、却つて扱ひにくいとか、悪くませて居つて、つまり、なにも劣つた結果を呈して居るとかいふやうに、テンから聯絡を講ずるよりも、幼稚園がない方がよいと云ふやうな、口吻をもらすものもあるやうであります。又幼稚園の方に従事して居らるる方々も、小學校の初歩の兒童の取扱ひ方に關して、幼稚園との聯絡上、斯くありたい、といふ希望を以て、熱心に主張する人も、あまり聞きうけないやうであります。畢竟この問題はまた着手されて居ないと云ひませうか、或は有耶無耶のうちに葬り去られて、一時の平安をむさぼつて居るといふやうにいられる有様ではありますまいか。私の關

係して居る、東京高等師範學校の附屬小學校第一部の生徒は、昔からのしきたりで、其の生徒の半分位はお茶の水の女子高等師範の附屬幼稚園の子供を收容することになつて居ります。これはたゞ幼稚園の子供を小學校にすぐ入れるといふだけの事で、形の上の聯絡に過ぎないから、まだ充分に内容の聯絡が考究せられて居りません。昨年兒童の體格の調査をして、之れを標準體格と較べて見た時に、一寸思ひ付いた事ですが、どうも尋常一年に入學した子供が尋常二年に成る迄の一年間の身體の發育狀況が、標準體格(三島博士の健體兒童發育表)に示されてある發育の率程になつて居ない、二年から三年になる處では、大分發育が良好で、線を以て描くといふと標準率よりも大邊急に昇つて居ることを見ますが、どうも最初の一年間はその律が甚だ宜しくない、これは第一部も第二部も第三部も同じやうであつたから、必ずしも幼稚園から來たか來ないかといふ問題に、關係

をつけて論じなくともよい事でありませんが、少くとも日本に於ける一年生の取扱ひ方が、或はあまりに大人扱ひで、家庭や幼稚園で頑是なく遊んで居つた子供に、毎日三時間とかいふやうな長い間、一定の順序のある仕事を課する爲めに、兒童の發育状態に斯くの如き變調を、惹き起したものであるまいかといふ觀を起したのであります、即ち云ひ換へれば、小學校に置ける初學年杯の取扱ひは、或は歐羅巴などに於ける媒介學級的の取扱ひをする方が、よいのではなからうかといふ觀を起したのであります。

斯様な問題は獨り體育のみならず、尙他の學科からも、考へらるゝに相違ありません折角幼稚園で發達しかけた萌芽を、小學校はちつとも省みないと云ふやうな事も、キツトあるに相違ありません、それで歐米諸國でも將來幼稚園と小學校の二ツを圓満に結びつけるには、幼稚園が今一層學校に近づいて來て、幼稚園と云ふものは、現在の學校が

價値ありと認めたもの丈を、授くべき所であるとするか、又は學校が最少し幼稚園に近づいて、幼稚園でやつた仕事を成る可く採用して、それをついて發達させらやうにするか、二つの方法より外に名案がないといふ様に申して居る様であります。前の方法によれば、フレール氏の所謂作業などは全部又は一部分消へてしまひ、直觀材料もコメニユース流に、繪を示す位の事となつてしまふであります、又後の方法によれば、小學校の初學年は、大部分遊戲などをやるやうになり、豆細工だとか、折紙だとか、積木だとかいふやうな事をするやうにならなければならぬと思ひます、何れにもせよ、幼稚園の先生と、小學校の初學年の先生とは、最少しお互に知り合はなければなりませんそれで、私は別に中間學校だとか、媒介學級だとかいふものを設けやうとは決して主張しません、寧ろ小學校には、幼稚園のことを知つて居る小學教員を一二人使用したならば、フレ

「ベル流の教育法を、小學校が利用する事が出来て、至極都合が宜しいであらうと思ふ。今一步進めれば幼稚園といふものは、恰ど小學校といふものゝ、初歩の階級と見做す様にして、事情の許す所にはどん／＼これを併置するやうにし、獨立した幼稚園よりも、小學校と併置した幼稚園を奨励するといふ事にしたならば、次第にこの問題が圓滿なる解決を見るやうになるであらうと思ひます。さうなると幼稚園といふものが學校系統上、必然考へなければならぬ問題となつて、幼稚園が急に其數を殖やし、又諸種の點から改良發達を促がさるゝことゝなると思ふので、我國の如く、幼稚園の數の頗る少ない國に於ては、其の奨励上から見ても大に得策であらうと思ふのであります。

心の花

福羽美靜

匂ふ櫻は春の色

染めし紅葉は秋の品

人の心に咲く花は

千年の後までかゝるなり。

子供の色彩感覺に就いて(上)

文學士 菅原 教造

家庭に於ても幼稚園に於ても幼児と色彩との關係は極めて密なものであります。従つて色彩問題は幼児教育上最重要な問題の一つであります。即ち色彩專攻の菅原學士に乞ふて此論を掲載することにしました。精讀をおすすめすると共に、又各自の御研究を希望します(編者)

人間の色彩の感覺はどう云ふ風に發達してゆくものであるかといふことは、歐洲では餘程以前から注意されて、心理學の立場からも、又、人類學、生物學、生理學、文獻學等の諸方面からも熱心な研究が試みられて居るけれども、然し未だ一定の解決を見るまでには至らないやうである、私は此の問題が現今どう云ふ方面まで進んで居るかといふことを紹介して、兒童教育の參考に供し度と思ふ。

一、リーヴァース氏の研究

野蠻人の色彩感覺を研究した學者も澤山にあるけれども、其の中でトレース海峽の住民に就いて研

究したドクトル、リーヴアース (Dr. W. H. R. R. Voss) 氏と、フイリッピンノースの住民に就いて研究したドクトル、ウッドラーズ (Dr. R. S. Wood, Worth) 氏とこの二人が最も新しく且つ最も優れた結果を示して居る。

リーヴアース氏はロザボントの計色器を用ひて實驗して、色の感覺の鋭さと色の名との間には一定の關係がある事を發表して居る、例へば赤に對して感覺の鋭い人は必ず赤と云ふ名を知つて居り、青と云ふ言葉のない民族は其の言葉のある歐羅巴人に比べて青色を感覺する度が頗る鈍く、之れに反して言葉のある赤の方は鋭敏であると云つて居る。

又言語に依らない實驗的研究からすると、色彩感覺の發達には一定の順序があつて、一番最初には明が暗が分り、次に赤、黄、緑と云ふ順序で最後が青であると云つて居る。そして氏の説では色彩感覺の發達は、色の名の方から調べた言語の方

の研究と、色そのものも研究から來たものとは大體に於いて一致すると云ふのである。

二、ウッドラーズ氏の研究

ウッドラーズ氏の意見に依ると、色の感覺と言語との間には上述のやうな密接な關係はなく、又決して野蠻人の間に青の感覺が特に缺けて居ると云ふことは云へないと云つて居る。是れに依つて觀ると、色彩感覺に關する人類學的研究には未だ一定した結論が出來て居ないと云つて宜しいのである。

扱て次に子供の色彩感覺はどう云ふ順序で發達するものであるか、果してリーヴアース氏の意見に依るものであるか、それともウッドラーズ氏の意見に従ふべきものであらうか。これから此の問題に就いての研究を御紹介することにする。

三、ブライエル氏、ポールデン氏、ビネー氏の研究

ブライエル (Peyan) 氏は千八百十一年に、自分の

子供に就いて研究した結果を發表して居る。これは色と色の名との關係を研究したものであるけれども、其の結論には多少の疑問もあるやうに思はれる。

ドクトル、ホールデン (Dr. Holden) 氏及びボツヒ (Bosche) 氏の研究に依ると、色の名と云はせて答の最も正確なのは第一が黄で、次が茶、それから赤、紫、薔薇、橙、灰、緑、最後に青と云ふ順序であると云つて居る。

其の後、千九百一年になつて、リーヴアース氏がプライエル氏の意見に説明を施して、子供は二歳の終りまでは色を識別する能力が無いもので、又赤は青よりも先きに識別されるものであると云つて居る。

プライエル氏自身の言に依ると、氏が數年の間、自分の子供に就いて實驗した結果、子供は話の出来るやうになる迄は、緑と青、赤と黄、白と赤とを見別けることが出来ず、又、緑と青と灰色とは

互に混同されて區別が出来ないと云つて居る。ビオー氏 (Briete) の意見はプライエル氏の意見と頗る異つて居て、氏は青が最も初めに感覺されると云つて居る、然し氏もまた、プライエル氏の如く單に一人の兒童に就いて實驗したに過ぎない。此の二人の研究は、要するに色の知覺する順序を、色の名を知る順序から推して行かうと云ふ點が似て居るのである。

四、ボールドキン氏の説

マーク、ボールドキン氏 (Mark Baldwin) は、今述べたやうな説に對して餘程正確な批評を下して居る、而も同氏は「力計法」と云ふ特種の方法で色の名を用ひずに、自分の子供を生後九ヶ月の初めから熱心に實驗研究をした、此の「力計法」と云ふのは、種々な色紙を或る距離を隔て、子供の前に置き、子供が其の中の何の色を掴まうとするかを注意するのである、此の方法に依つて色が子供を惹き付ける順序は青、白、赤、緑であると云ふこ

とを發見した。

然し色が子供を惹き付ける順序は、必ずしも子供が色を知覺する順序であるとは斷せられない、何故なれば、自分の能く知つて居るものは、慣れて居るから却つて惹き付けられる度が薄いと云ふ心理學上の一般の事實から行けば、この研究の原理を否定することが出来る、

一體、色彩感覺の發達の順序の研究と云ふことは極めて困難な問題であつて、これ迄にも多くの専門學者が研究して居るけれども、未だ一致を見ることが出来ず、又今後も果して幾干の進歩をするものであるかと云ふ豫言も出来ないのがこの研究の現狀である。

五、色彩感覺の發達の研究法

今述べたやうな困難があるのみならず、猶其他の理由からも、諸學者の説が、直ちに子供の色彩感覺の發達の研究に満足な結果を與へるものであるとは決せられない、先づ第一にこの問題の扱ひ方

から云へば、今述べたやうな研究は單に色彩感覺の知覺的の基礎の取り調べに過ぎない、即ちこれは單に此の研究の一つの要素、半面の原因に過ぎなかつたからである。實は猶この外に大切な要件がある。即ち子供の色を知覺する順序を経験しやうとするには、先づ其の子供の境遇や、周圍の事情に大なる關係があるといふことを知らなければならぬ。即ち同一の境遇、同一の事情の下にある子供に就て、それ／＼發達の順序を探究して見なければ、完全な結論に到り難い。プライエル氏、ホールデン氏、ビネー氏の結果がそれ／＼異なるのは決して怪しむに足らないのである。

第二に其の實驗の方法に就いても完全無缺な方法を得ることは困難で、今の處一定した實驗法と云ふものがないと云つて宜しい。それ故勢ひ多くの人々の用ひた實驗法の中で、比較的完全なものを採るより外はない。此の意味から云つて今の處がルビニイ (Garbini) 氏の用ひた實驗法が比較的完

全であらうと思ふから、其の概要を紹介する。

六、ガルビニー氏の結果

ガルビニー氏は色の名を用ひて實驗する方法と、色名を用ひないで『力計法』に依つて子供が最初何の色を掴むかを見る方法との二を用ひて、色の感覺と色の名との發達の順序を比較研究し、そして色の名を正確に云ひ得るのは、色を知覺するよりも、餘程後であると云つて居る、即ち知覺は前で言語は後である。

氏の實驗に用ひた子供は、三歳から七歳までの男兒と女兒で、而も其の人数は殆んど五百五十人に達して居る、故に實驗の度數が不足であるといふやうな掛念はない。

氏の意見では色を知覺する順序と、色の名を覺える順序とは全然同一であつて、赤、緑、黄、橙、青、薔薇の順序に依ると云つて居る。

此の研究の結果は極めて大なる價值を持つて居るもので、此の發見から、左の五個の事實を學ぶこ

とが出来る。

- (一) 色彩感覺は進歩發達するものであること。
- (二) 色の感覺の發達には一定の順序があること。
- (三) 色の名は進歩發達するものであること。
- (四) 色の名の發達には一定の順序があること。
- (五) 色の感覺の發達と色の名の發達には、離し難い密接の關係があること。

而してガルビニー氏が言語學的研究から推論した説と、リーヴァース氏が言語學的研究から推論した説と、両面から研究された結果とに、非常に相通する處があることは注意すべき點である。即ちリーヴァース氏の順は白、黒、赤、黄、緑、青で、ガルビニー氏の順は白、黒、赤、緑、黄、青である。

ガルビニー氏の説に依ると、子供は二年の終りになつて赤と緑を知覺し、三年に黄を識別し始め、同時に橙、次に青、薔薇の印象を受けるものである。然し單に知覺し始むるに過ぎないのである決して完全に知覺し得たのではない。其の時から七

歳位までは僅に橙と青、薔薇とを判然知覺するに過ぎない。

此の結果は要するに子供は、二歳の終りに至る迄は色彩の感覺が缺けて居るもので、而も其の發達の程度は極めて遅いと云ふこと、又、明と暗、白、灰と黒は比較的早く知覺せらるゝものであること等を結論して居る。

七 ホールデン及びボッセー氏の說

ドクトルホールデン及びボッセーの二氏が千九百年に發表した說に依ると、或る着色した物體を置いて、其の背景の明暗を變化すれば、兒童が全然見へなかつた色に對しても、よく知覺することが容易であると論じて居る。

又、四角の色紙を、其の色紙の色と同じ明るさの灰色の紙の上に置いて實驗して見た、若し子供が其の色紙を掴まうとするならば、正に其の色を知覺したのであると云つて居る。

然し一方から考へると、子供が其の色を知覺して

居ながら、尙其の色紙を掴み取らうとせなかつたならば、どうであらうと云ふ疑問が起る、掴み取らうとしなかつたと云ふのは、要するに子供が其の色に對して興味を持たなかつたのであると考へる方が至當である。故に此の方法も亦、知覺の順序を決定する完全な理論とは云はれないのである。然し大體に於いて赤、橙、黄の知覺が早く、緑、青、薔薇の知覺が比較的遅いのであると云ふことが明にされたやうに思はれる。

八 前二氏の說とガルビーニー氏の說

との比較
前二氏の興味ある研究は、人類學的の研究の結果と類似點があるけれども、ガルビーニー氏の說とは相反した處がある。

ホールデン及びボッセーの二氏は、生後七ヶ月と八ヶ月との子供は、平均して赤色に對して最も鋭敏に反應し、十ヶ月から十二ヶ月迄の子供は緑、青、薔薇に對して最も鋭敏に反應するものであると確

言して居る。

然るにガルビニー氏の意見に依ると、子供の色を知覚する最初は十七ヶ月目から廿四ヶ月目の間であつて、其の色の順序は赤と緑が最も早く、三歳の間に黄を識別し、次に橙、青、薔薇と云ふ順序であると論じて居る。

九 ホールデン氏に對する批評

これで色彩感覺の發達に關する重要な學說の概要を紹介したから、更に進んで此れ等の諸說に對して第三者の立場から見た批評を試みやうと思ふ今ホールデン氏の説を考へて見ると、これには相當に疑問があるやうに思はれる。例へば子供が赤若くは橙、黄、緑、又は青に取り付かうとしたとしても、果して其の個々の色を知覚したのかどうかと云ふ事が疑問である。一方から考へると、それは赤、橙、青と云ふ個々の色を知覚したのではなくて、漠然と色そのものを知覺したに過ぎないと云ふ方が却て當つて居るやうに思はれる、此の

問題を考へると、先きに云つた子供が色を知覺する順序は、其の子供の境遇、周圍の事情とに影響されるものであると云ふ問題が頭をもたげて來る例へば米國の子供と日本の子供との間には必ず其の知覺の發達に何等かの相違がなくてはならぬ。日本の子供が赤、青、橙と云ふやうに個々の色を識別したとしても、同年齡の米國の子供はたゞ漠然と色と云ふことだけを知覺し得るに過ぎないと云ふ相違がないとは云へない。

十 色と色の名との關係に就ての批評

子供が一般に總の色の名を誤りなく云ひ當てるなど、云ふことは、到底斷言の出來ないことで、色と色の名との關係は一般に漠然として居る。即ち同一の色に對して、或る時は青と呼び、或る時は單に「色」と呼ぶかも知れない。ガルビニー氏とリーヴァー氏との意見に依ると、色の感覺と、色の名の知識とが並行して進むもので

あると結論して居る。しかし退いて考へると、子供は赤、緑、青といふやうに總の色を識別する事が出来ない時でも、先づ自分の好きな色の名を、どの色にも當て嵌めやうとするものである。例へば黄を見ても赤と呼び、青を見ても矢張り赤と呼ぶ場合が多い。此れは子供が單に色其のものを知覺すると云ふ證據で、成人が見るやうな赤、緑、青、黄と云ふやうな判然とした區別ある認め方をして居るのではない。それが生長するに従つて、その區別が段々明瞭に知覺されて來て、遂には完全に云ひ當てる事が出来るやうになる。

然し此の意見には反對の説があらうと思ふ。
 (一)吾々成人が何か新しい物を得たり、新しい考を持つた時は、必ず之れに名を付けやうとするのである。此の慾望が子供にも更らに甚しいと見なければならぬではないか。
 (二)此の問題は既にリーヴァー氏と、ガルビニー氏との實驗に依つて既に解決されて居るで

はないか。即ちガルビニー氏の「色と色の名とは並行して進むものである。」と云ふ實驗と、リーヴァース氏の野蠻人に就いて實驗した結果、名の無い色は知覺が困難であると云ふ意見とは明かに並行論を證明して居るではない。

しかし並行論者の此の非難に對しては又相當の辯解が立つ。元來吾々は名を知らない物に對しても矢張り知覺が出来る。そして一面に於ては其の物の名を知らうと努めるだらうけれども、又他の一面に於ては、名を知つて居る物に對するよりは、却つて名を知らない物に多く興味を惹く傾きがある。殊に名を知らない色に對しては、此の慾望が甚しいと見なければならぬ。現にヴァーチラー氏がヌビア人に就いて實驗した結果に依ると、名のない色に對して知覺が鈍いと云ふことは決して斷せられないと云つて居る。實際、色彩に關する觀念が全然缺けて居る民族に對しても、一度び之れ

に教育を施せば、少くとも吾々と同様の知識を持つやうになる。初めから少しも教へなければ色の名を知ると云ふことは出来ない。之れを反面から云ふと、若し教育の力を借るならば、多くの色の名を同時に覺へしむることの出来ること云ふ事になる。故に或る種の色の名が他の色の名よりも早く發達して居るとすれば、それは次の二つの理由から來て居ると云ふべきである。

(一) 其の色の名の發音が樂で、記憶が容易であること。

(二) 其の色に對する知覺が他の色よりも比較的發達し居るに依ると云ふこと、何故なれば子供が少しも識別することの出来ない色の名を知つて居ると云ふことは到底考へることが出来ないからである。(次號完結)

かゞり火の影も流れて長良川

下すうぶれの面白きかな

保育叢話 (承前)

光藤 ふで

○スレッツカラシな學生を世話せし實驗

十四五歳の少年で煙草は吸ふ、買喰は好き、女などの批評位は常の事、勉強嫌で遊び好き、人の悪口をいふ事が好きで、ふざける事が旨い、學校の成績は劣等で落第、寄宿舎に居りましたけれど、先生が持余して、退舎させられたといふ、手にも足にもおへぬ學生を預りました、
 マー何が故に此の子がかくまで情落しましたかと觀察いたしました、素より友達もよくなかつたでしようが、其様な事は末の事、唯保育者が教育を程よく仕なかつた爲と思ひました、否父母に眞の教育眼がなかつた故で御座いました。
 この子の父は醫師として中流以上の生活をして居ります、母は柔弱なる身體の心も同じに唯我子可

愛いといふより外には何等の見識のない人でありました。

最初此の子がかゝるスレッツカラシとは知りませんでした。唯忙然よくないと聞いて居りました、丈の時、此子の母様が父様と御一緒にお出でになりました時、已に此の子の憎落の半以上此の母君にある事を悟りました。

良人と車をならべて、來られました母様は、良人の色の黒い堅そうな身體とは反對に、眞青な顔色に血の氣は殆んどない位、神經過敏の相があらはれて、誰れの目にも半病人、いつぞや、抱車夫が奥様は一丁の道も歩行なさる事は出来ないと申しましたが、後で聞いて成程と思ひました。

初對面の御挨拶がすみますと、私をお呼びになつて、奥様一寸籠でもと仰せらるゝから、ザルを出しましたら柿や栗や漬物や種々の珍らしい品々を下さいました、其のお言葉の大柄なる

事、舉動の不法なる、氣短な私にはすぐ癪に障りました、すぐつき返してやらんかとも思ひました、マ―遠方から汽車や、車でワザノ、持て來た品を無下に返すも、奥様は兎も角同伴の旦那様に恥をか、せる譯とチツト我慢して、色々ありがたうと禮をのべましたが、之によりまして大凡そ其の人格の卑い事は承知いたしました。

人に物品を贈るのには、皆夫れ、禮儀のある事は今日中流以下の噂でも心得て居ります、又上から下へ與へるにしても、其れ相當の守るべき禮儀があると思ひます、しかるに大切な我が兒を預ける先生の内に向つて、かゝる舉動のほの見ゆるは、人を馬鹿にしたと思へば腹も立ちますが、全くこの母様に其の辯のないといふ事が分るのであります、いづれの方面から見ましても、教育眼のない母様と判断を下すより外仕方はないのであります、マ―放逸無頼なる其の

子の悪徳は全く母様のお植付けになつた種子だと思ひました。

サ一此の厄介至極のお子をお預りしまして、今日まで一年半余りになります、其の成績はどうかと申しますと、最初の一學期間は尤も謹慎して勉強しました爲、成績も余程よろしく、殆んど生れて始めての好成绩で御座いました、所で両親の喜悅、先生も驚かれた位で御座いましたが、根が人の面前と陰とを區別するといふ傾向が大變にある子で御座いました、いろいろ尻の暖まると同時に、地金を現はしだしまして、私共の眼を偷みては、買喰をする、煙草を吸ふ、胃病は此の子の持病で御座いまして、毎朝粥を食べる其のそばから、餅を食べ豆をかちる、自己の好むものは、一向構はぬ、貪食するといふ風で、時々訓戒を加へられると、其の當時は、少し謹慎して居りますが、三日坊主で、又ゾロ自己流の我儘が始まる、しかし監督者の主人丈は何となく恐いと見えまして、一

度訓戒されると反省することが見えぬでもありません、マー其の爲め今日までは、ドイヤラ面目を保ちて来る事が出来ました様なもので、前途はいかいと心配で御座います。マーかゝる子は受持の先生も大變お骨折りで御座いませうし、監督當事者の心勢も察せられますが、はたから世話します私共下女に至るまでも小言の種子が多いで御座います、此の子の一言一行殆んど可愛らしい事なく、生意氣盛りで無理もないとは申すもの、下女等に對しては威張りちらし、食物の如何を口にし、履物、傘の如きに至るまで、自己のもの破損すれば、求めるといふ事なく、求めてと請求もせず、黙して、人の品をコン／＼用ふるといふ風は、一から十まで厄介物で御座いますが、しかし、不自由を知らぬ子でありますから、悪心を抱いて、故意にかゝる事をするのではなく、只放肆の結果なので御座います、實に此の子の悪徳は決して彼れ自らの罪でなくして、之が教養の任を

時間や二時間に來るものでは無ければ、その病氣の發するまでにはその前兆を表はすに相異なる。然しまだ病氣だと氣がつかぬのだから勿論醫師を招ぶ筈もないのであるが、従つて醫師に見て貰ふといふことも無いのである。この時に當つて傍な人が望診、即ち一見してその人の様子の違つたのを見別れることが出來たならば、その病を重らせない上に、どんなに功があるであらふ。

この事はわけて母たるものに必要である。子供の病氣は癒り易い代りに子供は病氣にかゝりやすいものである、又病氣にかゝつても進行が烈しいから、よほど用心して置かぬといかぬ。それ故、望診する方は是非ほしいものである。

○疲勞の望診、望診といふても病氣によつて一々違ふ、それ故、母並に母となるべき人々は平生から注意し又醫師に聞いて病氣になりさうになつたら、すぐ用心する様にしたたい、そこで之から茲に子供の疲勞を望診する方法を説かう、一體疲勞

はちよつとした器械を用ゆれば、すぐ解ることであるが、その器械は五歳以下の子供には用ゐられぬし、又、簡單ではあるが、誰にも使用することにはむづかしいから、却つて望診の方が便利であらう。そして、疲勞は諸神經病の原因にもなるのであるから、之を説くのもあながち無用ではなからう。

一、目 まづ一ばん目につくのは目である、二重瞼になるとか、眼瞼がくぼむとか、遠見をみるとか、瞳孔が開くとか此等は皆疲勞の徴候で、民間でも子供が二重瞼になると氣をつけよと云ふて居る、これは共に疲勞の前兆のみならず他の一切の病氣の前兆であるからである。

二、手 手といふものもよく疲勞を表はすものである、手に力の無いこと、手を舉げること、手頭の後に當てることなどすべて手を下げないで上げたがるのは疲勞の一徴候である。

三、足 足も疲勞を表はすものである、貧乏ゆす

とりか椅子いすに腰こしをかけて居をる時に、足あしを前方ぜんぱうに延のばすとか、後方こうぱうに曲まげるとか、足あしを重かさなり合あはすと
か、色々いろく形かたちを變かへるのは疲ひらう勞らうした徴ちよう候こうである。

四、口くち、口くちが渴かくこと、口くちを色々いろくの形かたちにすること、
唇くちびるを舌した端たんで舐なめること、聲こゑが太ふとくなること、欠あぐ
伸びをすること、睡すい眠みん中ちゆう口くちを開ひらいて居をること等とう

五、鼻はな、鼻はなが邪じま魔まに感かんずること、おり／＼鼻はなをさ
することも亦また一ひとつちようの徴ちよう候こうである。

六、尿ねう、尿ねうの色いろの濃こくなること、これは明あきに疲ひらう勞らう
の徴ちよう候こうの一ひとである。

七、體からだ、姿しせい勢せいが悪わるくなり、ねたり起おきたり、物ものに
よりか／＼つたりいろ／＼體からだを持もて餘あますやうに見みゆる
のも亦また一ひとつちようの徴ちよう候こうである。

八、好このみ、好このみ平へい生せい好こうきなものが一向いっかう注ちゆう意いを惹ひくに足たら
ず、何なにを見みせても何なにを聞きかせても皆みな嫌きらひ嫌きらひとば
かりいふて一ひとつちようもこれがいと決けつ断たんせぬ、泣なく

かと思おもふてもさう泣なかぬが、然しかし黙もくして居をるので
もない、唯ただ譯わけもなく鼻はなを鳴ならして居をるのである、こ

れは疲ひらう勞らうの一いち兆ちよう候こうである
以上いじやう八はち個この條じょう件けんがあれば必かならず疲ひらう勞らうして居をるのであ
るから、母ははたるものは氣きをつけて休きよく息そくさせ睡すい眠みんさ
せるやうにせねばならぬ、氣きをまぎらせるために
賑にぎやかな處ところなどへ連つれて行いつては却かへつて子こ供どものため
にならぬのである。

松の操

月の桂も手折るべし
ことばの花もかざすべし

つきの桂をたをとる
言葉の花をかざすとも

時雨にそます降りつもる
雪にたわまぬ常磐木の

松の操をまもらずば
世に立つかひや無らまし

山家

垣根の川に魚をとり
軒端の山に鳥あそぶ

浮べる雲はかへり見ず
もとぬぬ富も餘りあり

峯にひらく花の眉
岸には撫づる苔のひげ

つきせぬながめ山深く
浮世のおもひ水あはし

子供の自重心(二)

倉橋惣三

如何にして子供の自重心を養つてゆくかといふには、消極積極二面の考察がある。

(甲) 吾々の日常子供に對して爲して居ることの中で、子供の自重心の發達を害して居る様なことはあるまいか。夫れには二つの大に注意すべきことがあると思ふ。過度の甘やかしと、過度の嚴格との二つである。此二つは全く南と北との様に兩極の違ふの様であるが、子供の自重心の發達を害するといふ點に於ては、其軌を一つにして居る。即ち共に子供の生活を餘りに自己以外の力にたよらしめる。甘やかしは勿論のこと、嚴格といふのが多くは綿密な干渉になつて、自ら考て、自ら行ふといふ氣力も習慣も子供になくなる。ぐつと根性の強い子供ならば、其干渉に反抗して意地曲りになることもあるが、それとて眞の正しき自重心と

二八
はいはれない。況んや大低の子供は周囲の干渉に負けて仕舞つて、無氣力者になる。之れは共に大に吾々の注意すべきことである。

(二) 次に自重心を養つてゆく方法としては

第一、子供の身體の健康、殊に神経系統の健康といふことが極く大切である。勿論、胃が悪い、齒が痛いとて自重心が減る譯のものではないが、心の力は屢々體の力に支配されることがある。少くも大に關係がある。且又健康上の缺點は、自重心をも病的ならしめる恐れがある。

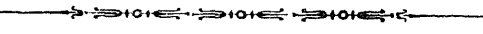
第二、子供は子供相應に權利を認めてやらなければならん。其分限内に於て、適當な位置と主張とを持たしてやる様に、周圍から供へてやらねばならん。從順も極く大切である。併し、正當な自己主張の氣力も極く大切である。幼時から一度も人に尊敬されたことのない。即ち自己を他から認められたことのない子供——貧兒孤兒などに往々ある——にどうしても、眞の自重心の養ひ難いので

は、其方面の教育に經驗ある人の屢々漏す嘆聲である。植物の伸々した、活々した發達には何より日光が大切である。子供の伸々した、活々した發達に必要な日光は、明く、温く、周圍から遇さるゝことである。暗い冷い地下室の様な、頭の上げよらない境遇に置かれては、子供の心は屈せざらん、萎えざらんとするも得ずである。

第三、子供に時々得意の感じを經驗させることも必要である。勿論、それが過ぎては、手のつけられぬ生意氣もの、傲慢者を作る恐れがある、之れは大に警戒しなければならんが、人間は總て、自己の成功に於て自己の力を信するに至るものである。いくら自重自信の強い人でも、餘りに常に失敗がついき、不得意のみであると、つい自信も鈍り易く、自重も折れ易い。子供に於て殊にそうである。子供同志相撲でもとらせば、始終必ず負ける子供は負けて、平氣になつて仕舞ふ。勝うといふ氣力も出ねば、自分で自分を弱いものとして仕

舞ふ。そこで、そういふ子供を引立たせてやるには、時には一層弱い子と取組まして、勝たせることも必要であらう、但し先生自身が故意とうそに負けてやるといふ仕方はよろしくない。他のことも同じである。手技にしても、遊戯にしても、始終組中で一番下手と、周圍からよりも却つて自分で相場づけをして仕舞はせる様なるは親切な保育ではない。そこに懇切な仕向けをして「我れと雖も」といふ感じを次第々々に持つ様にしてやらなければならん。殘に氣の弱い子に對しては一層此の必要がある。總て意志力の發達は、計畫して、實行して、成遂する處に満足もあり、發達もある。それを、いつも計畫して、實行して、不成遂といふのでは、成人ならでまだしも、子供にはつゝ氣が衰へるのである。成遂の満足、即ち自力成功の愉快といふことは子供に必ず經驗させ度いことである。

第四、併し小さい子供などでは、斯ういふ真正



面の自己經驗のみから自尊心を發達させるといふことは、多少困難な場合がある。そこで、周圍から自重を促す方法も必要になる。即ち子供を、より大いなる自重の一部として、そこから勵ましてゆくのである。あなたは何々幼稚園の幼児ではありませんか。あなたは日本の子供ではありませんかといつた類である。自分で自分の價值を認めるといふ迄に至り得ない子供でも、自ら尊いと思ふものゝ一部であるといふことは、少からず自重を促すのである。昔の武士の家で、子供が下品なことでもすると、子供として、そなたは武士の子ではないかと言つて自重させた類が即ち之である。乳母政岡が、いたいけな幼主と我子とを強く育てたのは一つに此の方法によつた。

第五、併し、子供の自重信養成に何より大切な又最も有効なことは、「自分は愛せられて居る」といふ感じである。親にせよ、先生にせよ、自分を決して棄て、居ない。自分を愛して居て呉れると

思ふ時に、自ら已れを重んぜざるを得ぬ感じが、子供心にも起る。之れが一番健全な自尊心である。彼の不良兒とか、少年犯罪とか、いろいろ憐れな子供達は、その境遇柄とはいへ、つまり誰れからも愛せられなかつたものが多い。怒も起る。邪念も起る。怠け心も起る。併し、我れを愛して居て下さる人々の爲に、自ら已れを擧める様のことはい出來ない。斯う思ふては子供心に正しい方に歸るのである。信せられて自ら信じ、愛せられて自ら愛し、重んぜられて自ら自んずるは人の心の常則である。是に於てこそ、實に謙遜なる自尊心が養はれる。我々子供に接するものは、我々の愛心の故を以て子供が自づと自ら正しい方へ勵まされる迄に、愛を籠めたいものであると思ふ。斯くて子供の眞に正しい自尊心は方法や、言葉や、取扱ひ方だけで養はれるものではなかつた。吾々の愛心にこそよるのであつた。

云ふことを聞かぬ子どもに
就いて

和田 實

教育の目的が適當と定められ、其方法が自然的な無理の無いものであつたなら、子どもと云ふものは、誰でも教育者の思ふ通りに、自由自在に、引き廻はすことが出来るかの様に、一般には、考へられて居るけれども、併し、事實は之を否定することが多い。實際、何處の幼稚園に行つても、保育上の難物と認められて居るものが二人や三人は必ずある。若し、大まかに歩合で云つて見たらば多くの子供の中には比較的難物が一割は必ずあると云つても然した大間違とはなるまいと思ふ。之は多勢の子供を管理する上から云ふたのであるけれど、尙一人一人の子供に就いて考へたならば特別な優秀兒でない限りは、之を教育者の理想に照して見ると必ず多少の缺點即ち短所を持つて居る

もので、何の子どもも一から十まで悉く教育者の目的通りに能く出来るものではないのである。斯う云ふと或は「それは教育者の技量が足りないからで、若し充分素養のあるものであつたら、そして其方法が充分當を得て居るものであつたら、如何なる子どもであらうと、教育者の希望通りにならぬものはない筈である。」と云ふものがあるかも知れないが、是はまた、餘りに早合點である。勿論、保母其人の技量で或程度迄は何んな子どもでも、取扱ひ得るには相違ない。が併し、何んな偉らい保母にしても、容易に引き廻はし得る子どもと、容易に引き廻はせぬ子どもとの別があり、そして其中に難易の程度があつて、最難物が數人あることは免るべからざる事實である。一人の子どもに就いて云へば、或點までは其子どもを充分教化し、努力せしむることが出来るけれども、何うしても、是以上は發奮させることが困難であると云ふ點があるに相違ない。是は議論ではなくて事

實である。所で、以上の事實は理論上果して正當のものであらうか否かと云ふことを考へて見ると、其處に多少の面白き點がある。左に少しく説明して見やう。先づ第一に教育の目的と云ふものに對して、子どもと云ふものは必然的に凡べての資性を一致せしめて居るものであるか否かと云ふことを考へて見るに、是は一致して居らぬ點が大にある、様である。何故と云ふに、一體、普通教育の目的と云ふものは社會生活を目安とした頗る人爲的のものであるから、其子どもも資質と云ふものには少しも頓着して居ない。故に、假令、兒童研究の結果を應用して一般に子どもに對しては此邊で我慢をしなければならぬと云ふ様な斟酌はするにしても、大體が何れも子ども其ものの個性を調査して、夫れに一致した所に教育の目的を置かうとしたものではないのであるから、教育の目的に對して、果して何れの子どもも何等の困難もなく一致するか、何うかと云ふことは定められた

問題ではないのである。云はゞ普通教育の目的(専門教育、職業教育の目的でなく)は教育者の考で勝手に極めた者であるから、之を子供の方の側から見れば、中には頗る好都合の者もあるに違ひないと同時に中には生れ付きが頗る教育の目的に遠くて教育者の希望する所に多くの點に於て副はぬと云ふ様なものもあるに相違ない。故に四十人の子どもの中には教育の目的を中心として其資性の最も好都合のものから順次に此中心の周圍に列べるとして考へて見ると其最後外周に立つた子供は大に教育者の努力を要し、苦辛を要するものがあるに違ひない。其中で特に程度の甚だしきものは實に教育者の所謂難物である。是と同様で一人の子供に就いて考へても、其子どもも資性の全部が平等でない限りは、即ち或點に優り、劣り、を持つて居る個性である以上は其子供の全生活を悉く教育者の思ふ通り平等にせしむることは困難である。故に教育上の難物は常に多數の幼児中にあるばか

りでなく一人の子供の中にも見出すことが出来るものである。

以上は教育の目的の上からの観察であるが、更に教育の方法の上から考へても亦同様な結果を見出すことが出来る。何故なれば、教育の方法と云ふものは成る程兒童研究の結果を應用して子供の心理生理に適つた方法を探るとしても、是は唯理論上に於ける一般論に過ぎないので、多くの子供が斯様であるから、此子どもも是でよからう位の所で實行するのである。決して綿密に其子供の個性に適するや否やを極めて而して後に施すのではないのである。又そんなことが事實出来る筈のものではないのである。唯教育者が實際に其子どもを扱つて居る中に漸次其子どもの個性を観察した上は之を其方法中に採り入れて所謂、人を見て法を説く^との場合を生ずるのである。故に此域に達するまでは教育の方法其ものが既に子どもに全然適合したものと云ふ譯には行かぬので、従つて教

育者の指揮命令と云ふものは悉く何等の衝突なしに子供に受入れられる筈と極つたものではないのである。即ち、云ふことを聞かぬ子どもと云ふものが此方面からも生じ来る譯である。尤も此點は教育者其人の技量で速かに各個性を發見し巧みに適當な方法を應用することになれば大に免れ得る困難ではあるが併し、斯様に熟練した教育家と云ふものは極めて稀なもので、多くは教育者其人の個性に因つて教育の方法と云ふものは一定した型を持つたものである。甲の教育家が採る所の教育法は乙の教育家のするところとは必ず常に異つた點を持つて居るもので、甲には甲風の教育法あり、乙には乙風の教育法があるものである。教育家が此様に既に一定の型を持つて居ると云ふと子供の生活とは益能く衝突するもので、若し、頑固に此型を主張するならば其人は多くの子供を苦しめると云ふ結果になるに相違ない。以上の様な次第であるから、云ふことを聞かぬ子どもと云ふ

ものは全然ある可き筈のものではない。子供は徹頭徹尾教育者に従順である可き筈であると思ふのは少し早計で、實際は中々思ふ通りには子どもと云ふものは引き廻す譯には行かぬものでありますから、一組の兒童中に多少の難物があつたにしても、何も直に自分の教育力を疑つて失望落膽するには及びません。之を大きくすれば教育の可能、不可能を論ずることにもなるし、教育の効力、教育力の限界と云ふ様なことを論ずることにもなるのでありますから六ヶ敷しいのは當然であります。それよりか難物があつたとしたならば、先づ第一に其原因が教育の目的と子どもの資性と一致しがたき爲めに然るものか、或は教育者其人の方法の不當なる爲めに生じた一時の現象であるかを、調べなければならぬ。故に其爲めには教育者は出來得る限り種々なる方面より色々に方法を變へ所謂手を代へ品を換へて子どもに當つて見なければならぬ。さうした上で、何うしても衝突の原

因が教育の方法の上にはないと極まつたらば、更に子どもの資性と教育の目的との關係に就いて調べねばならぬ。

次には此云ふを聞かぬ子供、是をば如何に處置す可きかが問題である。理論上、云ふを聞かぬ子供のあるのは當然のとであるからとて之を放任す可きか、或は教育の目的は嚴格なものであるから、子供は是非とも、是に副ふ様に教育されねばならぬ。従つて子供は是非とも、壓制しても教育者の指揮命令に従はしむ可きであるか何か、あまり大問題と云ふ譯でもないが序に考察して見ませう。先づ云ふことを聞かぬ子どもに對して教育の目的が讓歩する必要ありや否やと云ふことであるが、是は大體に於て、云ふまでもなく、教育の目的は嚴格なもので、さう妄りに讓歩し伸縮す可きものではないのである。

其調べた結果に因つて、或は教育の目的を變更するか又は子どもを鞭達しても壓制しても是非とも

教育の目的を達せしむ可きかを考定す可きである。併しながら、教育の目的と云ふものは頗る嚴格に維持しなければならぬ。之が常に動搖する様なことでは教育の威厳を損じて、詰りは教育を普及することは出来ず、各人は唯各人の勝手に生育し成熟するのと同じことになつてしまふ。私は算術は嫌ひです。と云ふ子どもには、ウンさうかそれではお前には算術を抜いて遣らうと云ふ様なことをして居たのでは、教育は到底普及することは出来ぬ。故に教育の目的は出来る限り嚴格に維持しなければならぬ。即ち萬止むを得ざる限りは之を變更したり斟酌したりする必要はないのである。既に教育の目的が斯様に嚴格に守らるゝ必要ありとすれば、教育者の採る可き道は唯種々なる方法を盡くして其衝突を避けつゝ、教育の目的を達する所に存すると云はなければならぬ。手取り早く云へば教育者は常に是等の教育的難物を一人の子どもに就いて云へば幾等かの難點前にして、

之と悪戦苦闘した上、何うにか斯うにか之を制伏して、以て教育の目的を達する所に教育者の仕事が存在するものと思はねばならぬ。尤も是を極端に云ふと普通一般の教育者と感化院や白痴院の先生との區別がなくなつて仕舞ふ様ではあるが是は是非もない仕儀である。實際の所、感化院白痴院の先生と普通一般の教師とは此悪童感化(普通教育の方で云ふと少し大げさで悪い言葉であるが)や資性改善と云ふこと丈で考へて見ると單に仕事の難易に程度の差があるのみで別段變はつたことではないのである。故に程度の低き改善的職業は普通教育の側に於ても無論行はなければならぬ。一人二人の輕き難物は無論専門の感化院や白痴院に送る迄もなく、普通教育の範圍で努めて改善を計らなければならぬことである。唯普通一般の教育者は是以外に他の普通兒や優秀兒を同時に教育して大に積極的に活動する任務を有することが感化院の先生や白痴院の先生と異なる所である。

要するに、所謂云ふことを聞かぬ子どもと云ふものは單に我儘や一時の事情で現はれるもの、外に、深き根帯を有する原因即ち教育の目的や方法が子どもの資性と觸接して教育と云ふ活動が起らうとする其所に根を持つた所の原因からして出で来るもので、何處の幼稚園に於ても、又何の子どもを採つて見ても、必ず一人二人は有る可き筈のもので之を全然除くなど、云ふことは事實空論に過ぎぬことであるから、教育者たるものは是等の事實に出會しても妄りに落膽したり失望したりしないで、常に如何にせば是等の特別兒を扱ひ得るかに就いて考慮して置いて、臨機應變の處置を巧みに採ることが必要である。此臨機の處置に就いて多くの輕験と多くの考案とを有する人が尤も老練なる教育家たるに必要な一資格である。

楠 母

は、そ葉のまもりしなくば楠の

このみ空しくくちぬべきかな

愛兒を失ひし二三の實例

戸 倉 廣 雅

三六

茲に教育なき母親の真心より出でた話の面白き實例を擧げて見る。余の近所に大木某といふのがある。向ふ三軒兩隣りの御多分の義理と缺かさぬ一と通りの交際をして居る。今日はとか、お早ふとか、今日は御天氣とか、いやとふも雨で困ります、御同様で位の會話は、これは男同志の普通例、この會話からは、別に何も湧いて来ないが、女同志は辭の多いもの、さてはや一寸往來の立話にも十分や二十分は物の數ではない。世間話や迷信話をよく聞かされて居るのは、余の妻君である。ところが此の大木某に二人の女の兒があつて姉のみね子は今年八歳での學齡兒近所の學校へこの四月入學したてのたいたい盛り、妹の貞子はまだ四つ五つの煩はなさ、いたづらが其の日の仕事、姉のみね子は惣領のことゝて、兩親の寵愛と一方なら

ぬ手の屈き加減、痛いも痒いも、人に向ては何角
 との自慢、日増しに道理が解つて来て益々兩親の
 愛が集中した、他人に四五人の兒があれば、此の
 一人でこれに匹敵せしめやうとする親の奮發、我
 が子を思ふ親の心は大抵こんなものであらふ。
 ところが道長ならぬ缺けたることの多き世の中、
 天は腦膜炎といふ恐ろしき病を、此のみね子に與
 へたので、花も紅泥と化する五月の初め、憐れ病
 むこと僅か一日翌日の午前に不歸の客となつた。
 いかにも果敢なき人世とはいへ短きものは此の兒の
 數命と、返らぬことを繰り返して兩親の袖の乾く
 間もなく、なくなく野邊の送りを濟ませたが、未
 だに我が子の面影が眼にちらつて、さうあつて
 なく彼の世へ往つたとは思はれぬ終二三日内には
 歸つて來ると感ぜられてならぬとの述懐、余も
 妻君も五歳の長女を失つた經驗から割出しても、
 同情の涙を禁じ得ぬので、世間話や迷信話は鼻の
 先きであしらつても、これ程の誠は、ホんに御氣

の毒と遇ふ度毎に繰り返さしめられたのである。
 憐れなことはよく集つて來るものである。余が知
 れる今一人中田某といふのがある。これには女兒
 三人男兒三人あつて、余と匹敵する子福者である
 が、この方は主人公老人で長女は我が儘もの、婿
 撰み、嫁には往つたが亭主を口の先で丸めて三日
 に一度の里歸りを繰り返して遊んで暮して居る。
 妹のすゝ子は今年は二十の女盛り、器量は姉に比
 べては聊か二の町であれど、體格美は姉には優つ
 て、尤も無口で勉強で迄所での評判娘、余も近
 所がてら彼の女が十四歳の秋頃から知り初めた。
 姉の我儘にも驚いたが、姉妹雪と墨の此の妹の温
 順にも驚いた位である。兩親も亦姉の我儘に愛想
 をつかし、妹の温順を愛して居る。姉が印刷工女
 で成功した壺に倣ふて小學校を終るか終らざるに
 印刷局へ勤めの身、稼いだ金は懸ての嫁入仕度と
 兩親は指折數へて成功の曉を樂んで待つて居る。
 此のすゝ子嬢近頃は少しも顔が見えないと噂して

暮すも浮々と三四箇月も經つて聞けば腸胃の病氣で未だに床を離れぬ長煩ひとのこと、母親は嘆息して彼の子は今まで碌々薬を飲んだこともない壯健な、兄弟中で一番丈夫と安心して居た甲斐もなく、斯る長煩ひととなつて、當人のやせもこのするを、看護する親も氣が氣でない、余の妻君が度々聞かされたが、さて終には腹膜血核とかいふ重病と變じ正に半年の床ずれに身動きならぬまでの容態と變り、醫者も見放す憐れの終り、花の盛りのご二十歳も誠の春は知らずして、空も五月雨のさめざめと降る涙の中に野邊のいとなみ濟みたれど、濟まぬは兩親の心の中、多くの小供の其の中に彼の子ばかりは眞の子供と思ふて居たが、今となつては一番不孝、年とつた兩親に憂き目を見るも、思へば天道恨めしと、逢ふ人毎に語つて居た。さて子を持つた親の愛、子を失つた親の心、何れ優り劣りはなきものである。此の兩家の妻君が余の妻君に漏らした嘆息が即ち話の種となるので

ある。
中田某の妻君は余の妻君に語つて曰く大木のみね子さんは年は漸く八つである、小學校へやつと入校した幼稚な兒で、尤も煩ふことたつた一日、苦勞も漸く一日のこと、到底助からぬものなら、一日の中に形付く方は未だ呆らめやうはあつたもの、家のすいは半年も長い間、兩親に莫大の苦勞をかけ、尤も二十歳までも無事に育て上げたのが、たつた一段の上り際で、どしんと本の土に歸る、算盤取つても御覽なされ、差引非常な損耗でと、どふやら大阪辭で結びさうな嘆き振りであつた。
大木某の妻君は余の妻君に語つて曰く、中田のみね子さんは最早二十歳にもなつて道理も解つて来たところへ半年も兩親の介抱を受け、金で買はれぬ慈愛の味を嘗め盡して、醫者も見放すまでに厄介になれば、子供としても遺憾なければ親も壽命と呆らめよいが、家のみねを御覽せ、たつた一日

の煩ひ、両親の愛を十分注ぐ暇とてもない、残り多しことをして呉れました。同じ不幸とはいふもの、みねほど不仕合せなものはありません。

両方の嘆きを一身で聞いたは余の妻君、當人同志に相向つて言はしめたら果ては喧嘩になりそうない言ひ分も、詮ずるところ我が子の愛に牽かされての誠である。余の妻君は無學で、最も余よりも諦

めのよい單純反頭の女であるが、此の如き二人の母親の述懐を聞いて、余に語つて曰く家の喜美江こそ彼の二女を失つた不幸にも勝つたものであ

れ、器量も數倍優等ばかりでなく、舉動言語神々しきまでに優美であつて、尤も家が貧窮の至極の際に世を辭したのであるから、あの時、金があつて十分療治したらばとか、切めては好きなもの

も興へてとか、思ひ出の種は洋々として涙と共に盡きぬ、さてもきみ江は天下に異例のない不幸者である。

これでは丁度禪學問答めいた話で終つたのである

が、何れも無學の妻君連ながら、我子いとと思ふ親心は貴賤貧富をおしなべて苦しきものであるといふ實例は甚だ多いことであると思ふ。子を思ふ道に迷ひぬる親の心は眞に愚なるものである。

白　蓮

泥のうちより　ぬけいで、
濁にしまぬ　はなはちす

月のひかりか　ひるすごく
霜とさゆれば　夏さむし

亂るゝつゆは　たまとみえ
かをれる風は　身にぞしむ

水のすがた　雪のいろ
つゆなげがしそ　世のちりに

白　菊
草木もかけれし　その、うち
雪にも色は　まさりぐさ

いたやく霜は　身をよそひ
さえゆく月に　香にほふ

露はくすりと　きくのみづ
梅はみさをの　おのがとも

やみの夜半さへ　てらすなり
東籬のもとに　文や見ん

保育の實際

幼兒に對しての説話ぶり

双葉女學校保母 後藤りん

天皇陛下の御話に就て

今日は、皆様の、大々お好きな、天皇陛下の御話をいたしませう、陛下は何麼な御附きをして入らつしやいますか……又御服装は何麼な御服装で入らつしやいますか、幼陸軍大將の御服さうです天皇陛下は此日本の國で第一等のお豪いの方で、それで陸軍と海軍との總大將で入らつしやるのですよ、此繪のお服装は大元帥のお服装でお帽子と、お腕の金筋は何本ございませうね、一ツ皆さんと一所に數へて見ませう、一二三四五六七……七本、澤山で入らつしやることねと申しますと、(其時黒板畫ニテ、一寸海軍大將ノ) 幼兒『ヤー豪イナート』非常に感心する……『陸軍

四〇

と海軍の大將だつて……『僕も今に天子様になるのだ』と頻に、りきみ出します(此時保母は幼兒相應なる注意を興へよ)『譬へば如何程皆さんが豪くとも天子様にはなれません、して天子様になるのには天皇陛下の御子様か、さもなければ宮様方が御位に即かれるのであると言ひ聞かせ、若し二や一の組なれば殿下及び皇族方のお肖像を拜させて其御方々の話にうつるも宜し』併し大將までになら、誰でもなれるのでありますから、早く成人なつて、大將のやうな立派なお方におなりなさい、其時には先生はお婆あさんになつて杖をついて、皆さんの御家へ御馳走になりに入りますから、何卒澤山御馳走をして下さいよと申しますと、幼兒は、大得意になつて『エ、入らつしやい、屹度ね、本當にですよ』念を入れて申します『其愛らしさ、嬉ばしさ、思はず涙かこぼれます』今話の中に日本と云ふことがありますが三の組あたりでは日本とは何の事だか分らないのですか、

「一體何んのことですかと問ふて御覽なさい」ン
 レハ、面白くことを申します、三の組あたりは
 陛下の御肖像を拜見する位で澤山です（さうして、
 皆さんの阿父様や阿母様や、先生や、貴君方も、
 皆一ンナ、天皇陛下のご臣下なので、それで、あ
 りますから、天子様のおつしやることはなんでも
 よく言ふことを聞いて決して背くことは出来ない
 のであります、今度の戦争で日本がロシアに克つ
 たのも、天子様がお豪い上に亦臣下が君の爲め國
 の爲めに、一生懸命に働いたから、それで捷つた
 のです、それですから、皆さんも早く成人なつて、
 身體を壯健に、それで勉強もして、大將のやうな、
 立派な豪いお人におなりなさい、そして今よりも、
 モット、強い日本にしてあげなければなりません
 ン、（幼児ハ何デモ豪イコトハ大將ダト思ツテ居リマスカ）こ
 ん、（ラ、豪イコトノ代名詞ハ大將デモ宜シト思ヒマス）こ
 んで二の組や一の組になりますと、日本國は露國
 よりも小なること、日本人は西洋人よりも小さい
 こと、それで日本は強いわりには貧乏であること、

支那や朝鮮、ロシアは隣國で在ること、（丸玉デモ宜
 ツ黒板ニ大小及距離ナドチ示シテ、）又日本は正義の國で
 口眞似手眞似テ形容シテヤルベシ）又日本は正義の國で
 あるから、弱を扶け、強を挫くの勇あること、日
 本と同盟した英國は、世界第一の強國であること、
 日本は今迄東洋の日本でありしが、今度の戦争か
 ら、世界の日本に成つたこと、なぞ極く簡単に面
 白く、感情的に話してやるべし、それは、幼児は
 思はず拳を固めて、りきみながら、知らず識らず
 乗り出して聴いて居ます

「ナニニ意憤ものだからさ」
 「それだつて勉強しないで遊んで許りいるか
 らさ」
 「ナニニ、サウジャーナイ、黒パンばかり齧
 つているからさ」

又中には天子様も弱虫で威らくないから負けるのだよ、なぞと隣りの人と口論して終りに、ネー、先生と云て訴へにくる實に一場の活畫です

其時先生は除々口を開ひて、いや、天子儀に何處の天子様でもお弱い方は一人も無い、皆んなお蒙りなのであるが、唯、臣下の内に天子様の御仰をきかぬ人があるから、幾ら大きな國で兵隊や軍艦が澤山あつても負けるのです、日本はさうでない、宛如、反對なので、そして第一天子様のお仰に背くやうな人は只の一人も無い、皆一人な共同一致して君の爲め、國の爲めにお命を惜まず働くから、何時何處と戦争をしても負けることはないのですと云ふと、皆大得意になつて愉快さうに威張つて居る

今日も亦天皇陛下のお話をとせまる
それでは亦いたませう、陛下の御家のお庭はそれほく擴い、お池もあれば瀧もあり、山も

あれば流れもあり、鯉も居れば金魚も居るし、松もあれば竹もある、梅もあれば櫻もあり、美しい花は澤山に咲いて居り、鶴や龜や、孔雀や鳩、愛らしい小鳥は嬉しさうな、聲を出して、彼方此方に飛びまはつて居る、又御殿の方も、それはく廣く立派で、神々しいばかりに壯麗でありますし又お橡側の長いこと、廻り廊下が、ズート何十間だか分らぬ、此幼稚園を十も二十も合せた位、二階も三階も、ドレモ皆見晴しの好いお坐敷ばかりで、お女中やご家來なども澤山く居りまして、なぞと、順次興味を添へて話し聞かせますと、幼鼻「ア、僕も往て見たことがある、阿父さんと一所に」と言ひ出す
ア、『さうでしたか、それでどんなでしたか』と問ひ返へすと幼鼻「僕が往て見た時には天子様がお庭で運動をして居らつしやつた」なぞと答へる、如何にも其答への面白きこと一同覺えず破顔一笑を催すことがある。

此の所で實物或は繪で花鳥をみせ、之に就て色々
の話をしたり、保母と互に鳥の啼き真似などをし
て居ても一日の仕事はあります

他日又陛下のお通りの話をせよと

せまる

御旗の話、御紋の話、御服装の話、侍従の話、お
馬車の話、車内の御様子、果ては陛下のお顔つき
やら、侍従の御年輩、前驅者、別當、騎兵の話な
どを、手真似、口真似もて、なるべく簡單に興味
を添へて如何にも今目前に陛下のお通りあるやう
説き聞かせ、終りに拜觀人の注意にまで及ぶ「さ
あ、皆さんも君が代を唱ふて御祝ひ申上げませう」
と云ふと皆々保母の真似をして嚴然と起立しま
す、君が代二回合唱(如何にも愛らしき中に自づ
と威張つて唱ふさま、いと殊勝)「什麼も皆さんの
様な可愛らしい、お顔でお行儀よく、お通りを拜
見して、君が代を唱ふてお目に掛けたら、嘸かし、
天皇陛下は、お馬車のお窓から、お顔をお出しな

さつて、お嬉しさうに、覺て居らつしやるでせう
かと、言ひますと、或る幼児の一人「僕も此間天
子様のお通りを拜見したら、天子様が窓から顔を
出して僕の顔見て笑つて居たよ」と、すましこん
で言ひ出した(此時保母ハ幼児ノ言葉)「それは、よかつ
たこと、安さんの様な、エライ良い兒が今におほ
さくなつて、此の日本の國を今より、モット〜
強い國にして呉れるだらうと、天子様は喜んで
居らしたのでせう、それですから皆さんは、阿
父さんや、阿母さんの言ふことを能くお聞きなさ
ると同じ様に、天子様の仰しやることは、聊かも、
背かぬやうに爲さねばなりません、と話しきかせ
ますと、皆大満足の様子です
兒童は漸が好きですから、決して厭きることとはあ
りませんが、天候と共に兒童の現況を見計らひ、
或る時は繪を見せたり、描ても見たり、手技や、
積みや、板排べで、隨意應用させて、ご覧なさい、
充分胸に這入て居ますから、内外共に何の遊戯に

でも盛に應用して遊びます

右の話の内にある、兩陛下。兩殿下。各皇族方の御旗。各條約國の旗印は日本國にて重要と認むる旗印。果ては諸信號旗の隣國の天皇陛下、日、露、清、兵隊の對照。日本軍艦の種別、海陸軍の對照。及各任務。或は武器。及び使用法等、幾等でも聯絡、敷街が出来ますから保母たるものは成る可く識見を博くして何時でも兒童の間に答へ得るだけの用意を備へられんことを希望する

誰でも熟練の少いものが話をする、直に小兒を大人に見て話されますが、實に幼兒に對しての話の方は他見には馬鹿くしく見ゆるくらい、自分も小兒になつて話して貰ひたい、そして出來得る限り感情的に復た幼兒が日頃親しく觀察して居るものから、即ち既知より未知に進んでゆきたい、且つ又土地の狀況と幼兒たちの身分にも依る、なせなれば橋を知らぬ兒に橋の話をして、少も感じが無い、又上流の兒に向つて「ナンダ、テメ

四四

くガ、ワルインジャーネーカ」と云ふ様な口調では話でも薩張り譯が解らぬし、又下流の見に向つて「アナタ、オヨシ、アンバセ」では是亦聊の興味を持たぬ、諺に人を見て法を解くとあります

が實に其通りであります

寄稿 募 集

保育の實際を記したる原稿を御寄せ下され度願上候

積木遊びの實際

粘土の實際

豆細工の實際

繪畫觀察の實際

など何んでも宜しう御座いますからなる可く

詳しく御記載下され度御願申上候原稿用紙御

入用の方には御一報次第御送申上候宛名は

東京市小石川區竹早町三四

和 田 實

と御記し下され度毎月の締切は廿日に御座候